

ショパン：アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22

ポーランドのワルシャワ近郊に生まれたフレデリック・ショパン(1810-49)の作品は、大半がピアノ曲だった。デスト男爵夫人に献呈されたOp.22は元来、ピアノとオーケストラのために書かれ、ポロネーズの部分か1830～31年に、序奏に当たるアンダンテ・スピアナートの部分が1834年に、それぞれ完成された。今日ではオーケストラ・パートを省いて、ピアノ独奏曲として演奏される機会が圧倒的に多いが、充分に華やかな演奏効果を持つ。

曲はまず、ト長調、3部形式による「アンダンテ・スピアナート」に始まる。「スピアナート」とは、「滑らかな」といった意味のイタリア語である。続く変ホ長調の「華麗なる大ポロネーズ」は、長いコードを伴う3部形式で書かれており、ポーランドの舞曲ポロネーズの、独特の勇壮なリズムを生かしながら、華やかな曲想が展開する。

ショパン：ワルツより(3曲)

ショパンは、ワルツを20曲ほど作曲した。各曲の形式は、ほとんどが3部形式またはその変形であり、ワルツの3拍子の基本的なリズムや伴奏音型は、ほぼ忠実に踏襲されている。今回は、次の3曲が演奏される。

ワルツ第6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬」:

短いながら華やかで、洗練された味わいが魅力的なワルツ。1846～47年に作曲され、D.ポトツカ伯爵夫人に献呈された。ショパンの恋人ジョルジュ・サンドの愛犬が部屋のなかを走り回る様子を表す、というエピソードにより、「小犬のワルツ」の愛称で親しまれている。

ワルツ第9番 変イ長調 Op.69-1「告別」:

1835年に作曲され、ショパンの死後1853年に出版された遺作。自筆譜に「マリア嬢のために」と記されたこの曲は、当時の恋人マリア・ヴォジニスカとの別れに際して贈った、というエピソードが伝わっていることから、「告別」あるいは「別れのワルツ」とも呼ばれている。

ワルツ第10番 口短調 Op.69-2:

1829年に作曲され、1852年に出版された遺作。哀愁の漂う主題を中心に、ロンド形式で書かれているが、中間部ではマズルカ風のリズムも見られる。

ストラヴィンスキー：「ペトルーシカ」からの3楽章

ロシア出身のイーゴル・ストラヴィンスキー(1882-1971)は、その作品をロシア・バレエ団の主宰者S.ディアギレフに認められ、彼の依頼によって、「火の鳥」「ペトルーシカ」「春の祭典」という、3つのバレエ音楽を作曲した。大成功を収めたこの「三大バレエ」は、ストラヴィンスキーの初期の代表作となった。1911年に初演された「ペトルーシカ」の、ピアノ版としての3つの楽章は、1921年に作られ、作曲家の友人でもあった名ピアニスト、アルトゥール・ルービンシュタインに献呈されている。

第1楽章「ロシアの踊り」：サンクト・ペテルブルクの町で、謝肉祭にぎやかに繰り広げられている。そこに人形遣いが現れて、三体の人形(ペトルーシカ、ムーア人、バレリーナ)を、まるで生きているように踊らせる。

原 明美(音楽評論家) Akemi Hara

第2楽章「ペトルーシカの部屋」：ペトルーシカは、バレリーナに恋をするが、彼女は無視して部屋を出て行ってしまふ。かなわぬ恋に悩み苦しむペトルーシカ。

第3楽章「謝肉祭の市場」：祭りが高潮するなか、突然叫び声が響く。嫉妬したムーア人が、ペトルーシカを殺したのである。人形遣いが拾い上げた彼の死体は、哀れな人形だったが、それが不気味な姿に変わる。

シューマン：アラベスク ハ長調 Op.18

ドイツ・ロマン派の作曲家ローベルト・シューマン(1810-56)は、20歳代の10年間、ピアノ曲の創作に集中的に取り組み、約30曲のピアノ曲を書きあげた。「アラベスク」は彼独特の、たゆたうようなロマンティズムにあふれた小品であり、1839年に作曲され、F.ゼッレ陸軍少佐夫人に献呈された。「アラベスク」とは「アラビア風の」という意味で、アラビアの工芸品や建築に見られる唐草模様を指すが、装飾的で幻想的な性格を持つ楽曲の標題としても用いられた。シューマンのこの曲は、6つの部分が切れ目なく続く構成による。とりとめのない楽想が、装飾に彩られながら続き、全体に夢幻的な雰囲気をかもし出している。

シューマン：幻想曲 ハ長調 Op.17

シューマンは、ベートーヴェン記念碑建立募金に寄付するために、「オボルス(ギリシャ貨幣で、寄付金の意)：フロレスタンとオイゼピウス(ともにシューマンのペンネーム)による大ソナタOp.12」と題して、1836年にこの曲に着手した。しかし、師匠のヴィークに、娘クララとの交際を反対され、絶望のどん底にあった彼は、なかなか完成させることができず、また出版社の反対もあって、途中で「幻想曲」という題名に変更した。そして曲は1838年に完成し、記念碑建立募金の提唱者でもあった作曲家のフランツ・リストに捧げられ、作品番号17として出版されたのである。

曲は、3つの楽章から成る。当初は各楽章にも題名が付いていたが、それは削除され、代わりにF.シュレーゲルの詩が、モットーとして冒頭に記された——「この世のさまざまな夢のなかに 鳴り響くすべての音を通してひそかに耳をすます者にはすかな一つの音が聞こえてくる」。また、この曲の成立に、ベートーヴェンの記念碑が関連していたためであろう、曲中には、ベートーヴェンの音楽を想起させる場面も見られる。

第1楽章は、ソナタ形式によるが、主題の提示や展開のしかたには、シューマンらしい気まぐれな手法が見られる。終わりのほうに、ベートーヴェンの歌曲「遙かなる恋人に」の一部が現れる。

第2楽章には当初、「凱旋門」という題名が付いていた。この原題が示すように勇壮な、付点リズムを特色とする行進曲風の楽想は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第28番の第2楽章を想起させる。

第3楽章は、ベートーヴェン最後のピアノ・ソナタ(第32番)の終楽章を想起させるような、静かで冥想的な終曲である。